「学び方」を学ぶための大学院進学

環境都市工学部准教授
林　倫子（はやし　みちこ）

理系の学部生にとって、4回生で取り組む卒業研究（特別研究）は、大学教育の集大成です。3回生までの科目ももちろん重要なのですが、教員が敷いたレールの上を走り、用意されたゴールを目指すような、少し受け身の学びでした。しかし研究は全く違います。それまでに蓄えた知識と思考力を総動員して、興味関心を持った問題に挑み、誰も知り得なかった事実を解明しようとする。何を学ぶのか、そして「学び方」すらも、自分で見出す必要があります。手付かずの原野を探検するようなタフさが必要です。本当に大変ですが、その過程で得るものは非常に大きいです。私の実感では、4回生の1年間の成長は、それまでの3年間に匹敵するか、それ以上にもなります。

ですから学生には、卒業研究に取り組む1年間を大事にしていただきたいですし、もっと多くの学生に大学院へ進学してほしいと思っています。進学すれば、この貴重な1年間に2年間がプラスされます。物事がより深く見えてきて研究が面白くなりますし、卒論の研究成果を世の中に発表する機会も得られます。他大学の教員や学生、業界人と交流することで視野が広がり、自分が何をしたい人間なのかがよく見えてくるため、就職活動にも有利に働きます。

現代はまこと難しい時代で、本当に大事なことは何か、自分が何をなすべきなのか、一人一人が自律的に考え、行動していくことが求められています。技術者として生きる限り、生涯学びの連続でしょう。教員が言うのもなんですが、大学で学べる知識などごく限られたものです。だからこそ、学部、そして大学院の在学中に「学び方」を身に着けて、自ら課題を見出し解決してゆく力を持った人間になってほしい。そのように願ってやみません。